

## 外国語教育のあり方をめぐって

武井隆道

人文社会科学研究科助教授

本学の外国語教育の改善に関して提言したいのだが、この分野について何かを論じるときに必ず「つまづきの石」となる事柄を一つ指摘しておきたい。それは「教養」のためか「実用」のためかという目的をめぐる対立である。

最近になってこの古くて新しい論争が再燃した。きっかけは文部科学省の教育政策の変更である。同省は一九九八年に改定した高等学校学習指導要領において外国語科目の目標を「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」と規定し、コミュニケーション重視の方向を打ち出したが、これに対して大学教員やマスコミの間で強い反発が起こった。また小学校における英語教育の導入も検討されているとの報道もあり、これに対しても賛否両論（マスコミではもっぱら反対論）がかまびすしい。

私が授業を担当している比較文化学類では昨年、入学試験に英語のヒヤリングを導入すべきかどうかをめぐって教員会議で議論があったが、席上英語担当の先生がなさった次のような発言が記憶に残っている。

人間の精神形成にとって一番重要な時期である高校時代には、思考能力を養い教養を高めるために英語の授業では文章を読むべきであり、入試にヒヤリングが導入されればそのような時間が削られてしまう。これは高校生にとってかわいそうなことであり、最近の文教政策にははらわたが煮えくり返るような憤りを覚える、皆さんもそうでしょう？

と言うのである。私個人としては、同じ趣旨で言えば知的能力を養うには、まず高度な日本語の文章を正確に読む練習をすべきであり、高校での英語の授業には別の役割があると思うのだが。

「教養」か「実用」かの対立は今に始まっ

たわけではなく、すでに明治時代に現れている。

当時の英語教育は外国人教師による、発音や読みの正確さを要求した、今日で言うダイレクトメソードに近い方法による授業が主体で、これを「正則英語」と称し、これに対して日本人教師の授業は「変則英語」と呼ばれた。明治期の代表的な英語学者和田垣謙三は当時の青年が「高尚な書をよろこび、日常の英語を解さぬ」ことを嘆き、実用英語を「通訳の業」と軽蔑する気風があることを指摘している。

十九世紀の終わりごろ、ドイツの言語学者フィエトア(W.Vietor)は、ギュムナーズィウム教育に対して提言し、従来のギリシャ語ラテン語中心主義を改め、現代語である英語を新しいメソードにより導入すべきだとした。彼の提案したメソードがその後ダイレクトメソード(直接教授法)と呼ばれるようになるのだが、この方法は二十世紀を通じてさまざまな改良、発展を経て、今日の主流であるコミュニケーション・アプローチへとつながっている。これに対して、従来の古典語教育にモデルをとる文法訳読法は現代語教育の中にも根強く残り、ダイレクトメソード系統の方法に対して常に対立してきた。

本学では開学当初「外国語教育の目標を実用的能力の訓練を中心とする」と学則で

規定したことから、「教養」「実用」論争が宿命のように繰り返されてきた。『筑波フォーラム』第8号(1979年)と第9号(1980年)において展開された澤田昭夫氏と玉井東助氏の論戦を興味のある方は一読されたい。

このようにこの論争は長い伝統のあるものなのだが、その歴史の古さにも関わらず常に論点のずれたものであったと私には思われる。理念を語っているように見えながら実は方法が問題となっているのであり、この両者を無意識に、あるいは意図的に混同することによって、人々は解決を遠ざけてきたと言えよう。

この論争の本質が方法をめぐるものだというのは、簡単に言ってしまえば、文法訳読法という方法をもっぱら採用するか、他の方法を取り入れるか、ということに尽きるということなのである。言い換えると文法訳読法にこだわる論者は教養主義の仮面をかぶっているだけだということになるわけだが、この仮面を捨て去れば彼らには相当の理があるとも言える。その理というのは、発音や聞き取りなどの音声面や、日常生活上のコミュニケーションは、日本人の教師は原理的に教えることができない、できるのはいわゆる文法訳読によるテクスト読解だけだ、ということだ。これは日本人教師の能力の問題ではなく、そもそも不可能だということである。もっとも、コミュ

ニケーションという言葉を、後に述べるよう広く文化一般に関わる事象と捉えれば、日本人教師によるコミュニケーション授業も可能だと、私は考えているが、ともかく、仮に限りなくネイティヴに近い巧みな発音ができる日本人教師と多少訛りがある母語話者の教師とがいた場合、同じ授業料を払うのであれば学生はどちらの教師に教わりたいだろうか。私ならば躊躇なく後者である。母語話者がしゃべる言葉には、それがどんなに破格で不完全なものであっても正格性 authenticity があるが、日本人の外国语にはそれがないからである。外国语教育における教養主義志向とは、要するにこの限界を自覚し、日本人教師の授業は文法訳読法でしかできないことを認識している教師の無力感の裏返しなのである。

このような理念と方法の混同から次のようなおなじみの粗雑な批判が出てくることも指摘しておきたい。

いわく、コミュニケーション主体の授業はヒヤリングや口頭練習ばかりなので、知的思考力が育たない。この批判に対しては、コミュニケーションに内容があるかどうかはコミュニケーションそのものとは無関係である、と反論できるのではないか。読解にしても、いきなり高度な哲学書や文學が読めるようにはならないのだから、教養的には内容の乏しい題材を使って行う読

解授業もあるのである。

このような批判はコミュニケーション概念の矮小化ではないだろうか。コミュニケーションとはヒヤリングや会話は無論だが、文字による情報伝達までも含む幅広い人間の社会的活動ではないのか。社会が言葉によって成り立っている以上、社会に適応し、高度な文明環境で生きるためにさまざまな回路（口頭であれ文字であれ）でのコミュニケーション適応能力を身につける必要があるのでないか。またこのコミュニケーションに参加するということがよりもなおさず文化経験ということではないのか。

このような議論に見られるコミュニケーション・アレルギーは、方法としての練習形態と言葉によって扱われる内容的価値の問題とを混同しているところから来ているのである。

さて、以上の考察を踏まえての私の提案だが、筑波大学は大学院を中心とした再編を経た今、外国语教育の再編にも着手すべきであり、その処方箋を提案したい。最初に今まで述べたことの論理的帰結に即したドラスティックな改革案をスケッチするが、その後でいささか現実に妥協した穏やかな可能性を提示する。

まず日本人による外国语授業には正格性 authenticity がないのであるから、日本人教師は専門分野での授業に専念して、外国

語教育から撤退してはいかがだろうか。英語に関しては学生はすでに高校までに難しい入試問題が解けるだけの英語力を身につけているのであるから、大学では高尚な書物を読めばいいのであるし、もし本格的な実用英語力をつけなければいわゆるダブルスクールでネイティヴスピーカーに習うのが一番効果的である。英語以外の初習外国語はドイツ語ならばゲーテ・インスティトゥート、フランス語ならば日仏学院のようなところに請け負ってもらい、大学の学費の一部をこのような外国语専門学校の授業料に振り替えるなどということも考えられる。端的に言えば、いわゆるアウトソーシングである。

現有の外国语担当の教員はどう処遇すべきか。本学はもともと教育大学としての伝統があるのであるのだから、外国语教授法論の専門の研究は大いに推進すべきである。だから、外国语担当の教員のうちかなりの部分を教授法の専門研究者集団として再編し、それ以外の人たちは専門の言語学、文学、文化学の研究者として位置づければいいだろう。

次はこれより多少穏やかな処方箋である。外国人教員の数を大幅に増やし、彼らによってゲーテ・インスティトゥートなどの本国の語学教育機関が採用しているのと同じメソードによる授業を行い、組織としては外国语授業実施部門を大学院主体となっ

た大学本体から切り離し、半ば独立させるという案である。このような組織ならば一般社会人対象の外国语学校としても機能させることができるのである。アウトソーシングの依頼先を学内機関で行うような形である。

大学本体に所属する教員で外国语教授法を専門に研究する人は、この組織のオーガナイザーとして管理運営に当たると同時に、ちょうど教育学部門における附属学校と同じように実験研究の場としても活用できることになる。また学部や大学院卒業直後の外国语教員志望者に実習の場を提供することもできる。日本人教員による外国语授業は文法の補助的な説明と、日本と外国との文化比較を中心に日本人学生の言語使用経験を想定した内容のものとする。これは従来の外国语担当者が担当してもいいが、オーバードクター等の若手を任期つきで採用すれば彼らの生活の保証になるし、経験にも寄与するだろう。

それでもやはりドラスティックすぎるだろうか？正直を言えば、今までの本学での「改革」を見てきた者としては、このような「提案」が実現するという期待はほとんど持っていない。だから多少大胆なことを言っているのだが、この「提案」で提示した方向性は必然に基づいている、と言えば不遜だろうか。

(たけい たかみち／現代文化・公共政策)